

スラブ・ユーラシア学の構築

——スラブ研究センター21世紀COEプログラムの試み——

いえ だ おさむ
家 田 修

- I 脱「旧（ポスト）社会主義」, 脱「体制移行論」
- II 多様な現実を地域論としてどう捉えるか
- III 全国展開の次世代育成
- IV 地域間比較への視座

本誌『アジア経済』はこの1年、学界展望として地域研究関連の21世紀COEプログラムをしばしば取り上げてきたが、この企画によって異なる地域に関する最近の研究動向を鳥瞰することができ、有意義なものとなっている。なかでも本誌2007年12月号掲載の毛里和子「アジア学の創生」は端的に、地域はあらかじめ存在しているのではなく、「つくられる」と述べ、地域の構築性を明確に打ち出した。また本誌2007年9月号の「日本における地域研究の現状とこれから」（油井大三郎）でも、今後の地域研究の方向性が論じられ、地域横断性、間文明性、そして空間科学性が取り入れられるべき課題として提示された。従来地域研究がもっていた自己完結的あるいは国民国家的、つまり閉鎖的な地域像の克服が訴えられている。

さらに本誌2007年5月号に掲載された「地域研究コンソーシアム2006年度年次集会企画シンポジウム『研究史としての日本の地域研究——戦前、戦後、そして未来へ——』（瀬川昌久）では、地域研究を推進している研究教育組織が

地域の垣根を越えたネットワークとして「地域研究コンソーシアム」^(注1)を生み出し、積極的に他地域や隣接する地域の研究者と連携し、協力しあっている姿が紹介されている。つまり地域研究は方法論としても組織論としても「蛸壺」的な閉鎖性を脱し、既存の境界を越える「開かれた」地域像を生み出そうとしている。本稿で取り上げる「スラブ・ユーラシア学の構築——中域圏と地球化」という21世紀COEプログラム、およびこのプログラムを中心的に担った北海道大学スラブ研究センターもそうした地域間、組織間連携を積極的に推進してきた。

I 脱「旧（ポスト）社会主義」, 脱「体制移行論」

「スラブ・ユーラシア学の構築——中域圏と地球化」という5年にわたる大型プロジェクトの事業目的は、あえてひと言でまとめると、「ポスト社会主義」という対象認識ないし分析の方法から脱却することであった。つまり社会主義体制が崩壊して20年近く経つにもかかわらず、いまだ「旧ソ連」「旧ソ連・東欧」「旧社会主義圏」という後ろ向きの呼称が広く流布している状況を改め、実情に相応しい名前をつけること、そして、社会主義から欧米型社会への移行とい

う単線的な歴史発展観に基づく画一的分析方法を克服し、多様な現実の動向を映し出す分析方法を確立すること、これらが目指された。

したがって「スラブ・ユーラシア学の構築」が第一に提起したのは、他ならぬ「スラブ・ユーラシア」という新しい地域名称そのものだった。この新名称を国内外に広く知らしめることが課題とされたのである。実はいま、世界の研究者は旧社会主義諸国を全体としてどう呼ぶのか、様々な案を提示している最中である。例えば「ロシア・東欧」「スラブ・東欧」「ロシア・ユーラシア」「スラブ・東欧・ユーラシア」あるいは簡潔に「ユーラシア」とだけ呼ぶ例もある。さらには「ロシア・東欧・中央アジア」のように関連する中位の地域名称を列挙する場合もある。こうした新しい呼称はこの地域に対する認識の変化を示している。例えば、東欧は欧州連合（EU）の一部になりつつあるのだから旧ソ連東欧研究から除外する、という「ロシア・ユーラシア」理解である（オックスフォード大学ロシア・ユーラシア研究センター）。あるいは「ユーラシア」にはユーラシア大陸という地理的意味だけでなく、この地域がヨーロッパとアジアの両方の文明に跨っている、あるいはそのどちらでもない、という認識論的な意味が込められる場合もある。

「スラブ・ユーラシア」の場合は、そうした文明論的ユーラシア主義ではなく、歴史空間としてスラブ諸民族が比較的優勢であった、あるいは現在優勢であるという地域的限定性に基づいて、スラブ・ユーラシアを用いている。したがってスラブ・ユーラシア学においては、ロシア支配や社会主義を唯一の共通項として地域の同定がおこなわれている訳ではない。また現在

の国境を厳密な地域区分だと考えている訳でもない。さらにはハンガリーやグルジアのように言語的、民族的に「スラブ的」でない国や地域もその歴史的経験からみれば、スラブ・ユーラシア地域の重要な構成要素である。つまりスラブ的でない「異分子」もスラブ・ユーラシア学においては不可欠な考察対象であり、むしろ「異分子」を取り込むことにより、スラブ・ユーラシアという独自の空間が設定、ないし構築されたのである。

では、スラブ・ユーラシアという新しい名称が今年3月のプロジェクト終了とともに、学界でも一般市民の間でも広く認知されるに至ったかという点、道いまだ半ばと言わざるをえない。もちろん国内ではマスメディアや学術専門誌などが21世紀COEプログラムの事例として、しばしば「スラブ・ユーラシア学の構築」を取り上げ、これが新名称認知への種まきとなった^(注2)。また今年に入ると『講座スラブ・ユーラシア学』全3巻（2008年、講談社^(注3)）が刊行され、新聞の書評欄でも取り上げられるなど、2008年はスラブ・ユーラシアという新名称が社会的に広く伝えられる第一歩が記された。2007年には「スラブ・ユーラシア叢書」が北大出版会から刊行開始となっている^(注4)。長期的には、今後、次の世代がスラブ・ユーラシア地域を『講座』と「叢書」によって学ぶようになれば、今回の第一歩は10年後、20年後にスラブ・ユーラシアという地域名称が広く定着する始点とみなされることは間違いない。

新名称の国際的認知にたいしては、スラブ・ユーラシアを冠する欧文叢書Slavic Eurasian Studies（SES）^(注5)がスラブ研究センターから刊行されており、全世界の主要な大学図書館に配

架され、専門家の目にとまるようになってい
 実際、SESシリーズで刊行した巻に対して購入
 希望が海外の書籍商からしばしば舞い込み、ネ
 ット上の国際古書市場にもSESシリーズ物が顔
 を出している。つまりスラブ・ユーラシアはウ
 ェブサイト上で市民権を持ち始めている。もち
 ろん積極的に新名称の認知度を高めるため、欧
 米の国際学会でSlavic EurasiaあるいはSlavic
 Eurasian Studiesの名前を冠したパネルを数多
 く企画し、そのパネルに欧米の研究者や現地研
 究者を巻き込んできた。その結果、ロシアのA
 ・K・マゴメードフやイギリスのN・スウェイン
 のように新しい地域名称や、あとで紹介する
 中域圏Meso-areaを積極的に活用する第一線の
 研究者がでてきている。

もっとも、いまも欧米の専門家のあいだでは
 スラブ・ユーラシア地域の国々をまとめて「移
 行諸国」と呼ぶことが多い。これは単なる呼称
 の問題ではない。つまり「移行」という対象認
 識は事実上、スラブ・ユーラシア諸国は欧米型
 の政治経済体制へと移行するはずだ、という含
 意で用いられているのである。確かにスラブ・
 ユーラシア諸国のなかには欧米型の政治経済制
 度を規範として受け入れ、それに向けて改革努
 力をおこなっているところが少なくない。東欧
 の国々やバルト諸国がその典型だが、ロシアの
 ように、独自の改革路線を歩む国もまた、少な
 くない。つまり単なる社会主義から欧米型社会
 への「移行」では捉えきれない現実が存在して
 いるのである。その現実を地域の外にいる専門
 家が自分たちの価値基準に基づいて評価しても、
 学問的にはあまり価値がない。

そうではなく、欧米流の「移行論」や価値基
 準では捉えきれない現実それ自体を出発点とし

て受け止め、そこから研究対象をみる目を鍛え
 てゆく必要がある。この鍛え方が学としてのス
 ラブ・ユーラシア研究である。つまりスラブ・
 ユーラシア学とは次の世代の専門家を養成す
 るに際して、多様な現実のなかの何を拠り所にし
 て地域を捉えるのか、その拠り所の提示である
 と言えることができる。「多様な現実の動向を映
 し出す」具体的な研究方法は『講座スラブ・ユ
 ーラシア学』が与えている。これについては節
 を改めて述べる。

II 多様な現実を地域論として どう捉えるか

スラブ研究センターは2008年1月、「スラブ
 ・ユーラシア学の幕開け」と題した21世紀COE
 総括シンポジウムを3日間の会期で開催した。
 このシンポジウムの第1日目のプログラム「地
 域をつくる、くくる、えがく」がまさに「多様
 な現実をどのように捉えるのか」、その具体的
 な拠り所、つまり切り口を提示している。この
 第1部は次のようなパネルから構成された。

[第1パネル] 地域をつくる

大庭三枝 (東京理科大学) 「アジアの諸地域主
 義と重層的地域の形成」

石川登 (京都大学) 「社会的フローとインタ
 ーフェイス——東南アジアにおける『山地
 vs. 平地』構造の動態的理解にむけて」

高倉浩樹 (東北大学) 「人類学と地域研究—
 —シベリアを想像=創造する」

討論者：臼杵陽 (日本女子大学), 桃木至朗 (大
 阪大学) 司会：家田修 (北海道大学)

[第2パネル] 地域をくくる

宇山智彦 (北海道大学) 「帝国の弱さ——ユー

ロシア近現代史から見る国家論と世界秩序」

松里公孝（北海道大学）「新境界地域と人文地理学——地域研究戦略の新展開——」

橋本努（北海道大学）「スラヴ研究と『帝国』の概念」

討論者：山下範久（立命館大学），小松久男（東京大学） 司会：田畑伸一郎（北海道大学）

〔第3パネル〕地域をえがく

デイヴィッド・ウルフ（北海道大学）「スターリンの描いたスラブ・ユーラシア（スラブ・ユーラシアへのスターリンの視座）」

望月哲男（北海道大学）「現代文学におけるロシアのイメージ」

三谷恵子（京都大学）「Balkanとバルカン——言語学から地域研究へ」

討論者：亀山郁夫（東京外国語大学），篠原琢（東京外国語大学） 司会：沼野充義（東京大学）

以上のプログラムにみられるように、総括シンポジウム第1部ではスラブ・ユーラシア以外の地域との比較も念頭に置きながら、地域の主体形成（地域をつくる）、地域の広域的＝帝國的秩序形成（地域をくくる）、そして表象による地域認識を取り上げた。

『講座スラブ・ユーラシア学』全3巻も、順番の違いはあるが、ほぼ同じ内部編成で学の中身を提示している。以下が3巻の構成である。

第1巻 「開かれた地域研究へ——中域圏と地球化」

序文 スラブ・ユーラシア学とは何か

第1部 中域圏とは何か

第2部 地域はどう自らを構築するか

第3部 地球化とどう向き合うか

第2巻 「地域認識論——多民族空間の構造と表象」

序章 地域認識の方法——オリエンタリズム論を超えて

第1部 史料・芸術から見る地域

第2部 民族／民俗文化と地域

第3部 国家と地域の相互作用

第3巻 「ユーラシア——帝国の大陸」

序章 帝国と心象地理、そして跨境史

第1部 帝国論

第2部 空間表象（心象地理）

第3部 跨境史

『講座』全3巻の構成からみて取れるように「地域形成——地域をどう設定するか」「地域認識——地域の意味論」、そして「帝国——大きくくりの地域」がスラブ・ユーラシア学の土台である。

各巻をもう少し具体的に述べることで、スラブ・ユーラシア学が目指すものを明らかにしたい^(注6)。すなわち、第1巻『開かれた地域研究へ——中域圏と地球化』では、まず「中域圏」という新しい分析概念を提示した。スラブ・ユーラシアは今、地域の内外におけるさまざまな統合作用の影響を受け、特色ある空間的まとまりがいくつも生まれている。この中位の空間的まとまりが中域圏である。例えばスラブ・ユーラシアの西部では欧州統合の影響を受け、新たな地域的まとまりが形成されつつある（「東欧中域圏」）。また南部ではイスラーム復興などと連動する地域の繋がりが生まれつつある（「中央ユーラシア中域圏」）。東部では東アジアの経済発展に引きつけられる空間が登場しつつある（「シベリア・極東中域圏」）。もっとも、中域圏はこうしたかなり広いまとまりを持った空間と

してだけでなく、分析課題に応じて限定的な広がりの中かで設定することも可能である。いずれの場合においても、中域圏は新旧の統合力を含む複数の力が重層的に作用する場であり、地域をめぐる人々の空間的な認識も複合的である。この意味で中域圏は典型的な「開かれた空間」である。第1巻ではこうした分析概念の定義を行ったあと、それに次いで中域圏概念の応用可能性ないし分析射程を政治、国際関係、歴史、言語、経済など様々な分野にわたって検証した。

ひるがえって地球化時代において、地域研究はスラブ・ユーラシアに限らず、不可避的に地域外の様々な規範や圧力を考察のなかに取り込むことが要請されている。第1巻『開かれた地域研究』は地球化時代に地域研究一般が取り組むべき方法論上の課題を提示する狙いも併せ持っている。さらに「開かれた空間」という表現には、冒頭で触れたように、地域研究が閉鎖的な地域像のなかで蛸壺化しないようにという自戒も込められている。

このように第1巻では、地域内外から加わる求心と遠心の力、そして地域形成ないし空間的自己意識形成に焦点を当てたのに対し、第2巻『地域認識論——多民族空間の構造と表象』では、地域という概念そのものが掘り下げられる。すなわち認識論の視点から地域が論じられるのである。地域認識の在り方、つまり地域を設定することそれ自体の意味論は、地域研究という学問が生まれたときから問題にされ、とりわけサイドのオリエンタリズム批判以降、地域研究にとって避けて通れない重要課題となった。そのなかでスラブ・ユーラシア地域は地理的にも歴史的にもヨーロッパとアジアに跨り、さらにイスラームをも構成要素として成り立ってお

り、ここでは単純な西洋と東洋の二項対立で地域を論じるという方法は通用しない。『講座』第2巻ではスラブ・ユーラシアが置かれたこうした特別な空間的配置を積極的に生かすことを企てた。すなわち「ロシア帝国・ソ連でのオリエンタリズムのあり方や言説と権力の関係は、サイドらが説くよりもはるかに複雑である」「欧米と中東の特殊な関係性を背景に成立した従来のオリエンタリズム批判の限界を乗り越え、権力や偏見の構造が、単に誰かを悪者に仕立てることによって解体できるのではなく、社会の隅々に入り込んでいることを認識させる」(第2巻序章) ことこそを地域研究は目指すべきであり、まさにそうした問題を問うにふさわしい地域がスラブ・ユーラシアなのである。かくして講座第2巻では地域の素材に密着しながら、従来の東西二元の対立的な世界観や地域認識を相対化し、さらにはオリエンタリズム批判を超える議論を展開した。

第3巻の『ユーラシア——帝国の大陸』は、第1、第2の巻がスラブ・ユーラシアを周縁ないし周辺を通して論ずるという迂回的方向性を持っていたのに対し、最終巻として、地域の求心力であるロシアの帝国性を分析の中核にすえた。つまりスラブ・ユーラシアの諸々の構成要素が相互にどう関係しあい、どう括られるのか、というロシア帝国総体の問題を論じたのである。すなわち「肝要なことは、空間を相対化することである。複雑で曖昧な空間を、複雑で曖昧なままにとらえることである。この姿勢が、帝国、空間表象、跨境という本巻の三つのコンセプトを結んでいる」(第3巻序章、以下の引用も同様)。「地域はモノトーンで鮮明なかたまりではなく、曖昧で可動的な境界線で囲まれたモザイク」で

ある。つまり地域は「同質性に支えられた実体的な単位としてではなく、様々な力が作用しあう磁場として分析される」のである。「国民国家は16世紀にはっきりと起源を辿ることができる近代の構築物であるが、みずからを自然的な存在だと信じ込んでいる。帝国は、人類史に最も普遍的に現れた国家形態であるという点では自然的な存在だが、みずからの構築性を確信して政策を展開する」。つまり帝国もその構築性に注目すれば、「開かれた空間」としての地域という観点から分析可能なのである。近年における帝国論の隆盛においてロシア帝国研究もその一翼を担っているが、『講座スラブ・ユーラシア学』は理論的にも実証的にも帝国論の新たな方向性を指し示すものである。

21世紀COEプログラムが始まったとき、明確に概念化されていたのは第1巻の中域圏論であり、これが出発点であった。その後、5年間の研究の蓄積と発展のなかで、総体としてのスラブ・ユーラシアをどう分析し、どう意味づけるのかが決定的に重要な論点となっていった。そのなかで『講座』の第2巻と第3巻に所収された研究が生まれた。つまり『講座』の巻別構成はスラブ・ユーラシア学が形成される経緯を踏襲したという側面も持つ。これは半ば偶然のなせる技であったが、東アジア、中東、イスラーム地域などの広域的な地域研究を学として組み立てる際、まず全体像を論じるのでも、また閉鎖性の高い国家や小地域から論じるのでもなく、境界が不明瞭な中位のまともから地域を説き始めるのは、開かれた広域的な地域研究を進めるうえで、ひとつの有効な方法ではないかと考える。

Ⅲ 全国展開の次世代育成

今年1月の総括シンポジウム第2部(2日目)は「次世代の挑戦」と題され、若手研究者自身の自由な発想を基にパネルのテーマ設定、そして報告者、討論者、司会者の陣容が決められた。現役の大学院生、大学院を終えたばかりの新進気鋭の研究者たちがパネルを企画運営したのである。これから10年後、20年後のスラブ・ユーラシア研究を担う若手がどのようにこの地域を捉え、分析しようとしているのか、それを若手研究者自身に打ち出してもらったという訳である。

「スラブ・ユーラシア学の構築」COEプログラムの若手育成では、通常の21世紀COEとは異なり、学内ではなく、全国的な規模と視点で制度の運用を図った。もともとスラブ研究センターが全国共同利用施設という位置づけを与えられており、21世紀COEプログラムの申請に際しても、異例ではあったが、大学という枠を超えた若手育成を重視する姿勢を貫いた。以下が若手企画の3つのパネルであるが、企画立案者以外はすべて北大以外の所属になっているのは、そうした背景がある。

【第1パネル】ソ連体制の構築における学知の役割

金山浩司(東京大学大学院)「弁証法的唯物論はいかなる原理として働いたか——戦前期における物理学理論への適用と科学者集団の反応を通じて」

立石洋子(東京大学大学院)「国民史と民族史の狭間で——スターリン時代におけるソヴェト連邦史の叙述とその変化」

地田徹朗（東京大学大学院）「多民族「領域」
帝国ソ連における地理学と空間・地域認
識」

討論者：池田嘉郎（新潟国際情報大学） 司
会：青島陽子（北海道大学）

[第2パネル] 地中海と太平洋のあいだ——ロ
シアを内包する空間への跨境的アプローチ
志田恭子（北海道大学）「ポスト・ビザンツ空
間のなかで——ロシア帝国研究の跨境化が
拓く可能性」

木村暁（東京大学大学院）「サマルカンドにお
けるロシア統治のはじまり——あるイスラ
ーム法官の証言から」

石川亮太（佐賀大学）「19世紀末の露朝関係
——近代極東ロシアの対朝鮮交易とその主
体——」

討論者：野田仁（学術振興会特別研究員）
司会：左近幸村（北海道大学大学院）

[第3パネル] ロシアにおける宗教と国家——
帝政、ソ連、現在

長縄宣博（北海道大学）「五行の実践からみる
帝政ロシアのムスリム社会——ヴォルガ中
流域・南ウラルを中心に」

赤尾光春（北海道大学）「ハバド・ハシディズ
ムとロシア——ユダヤ教信仰の存続をめぐ
る闘いの記憶——」

伊賀上菜穂（大阪大学）「ポスト社会主義時
代のロシア正教古儀式派——シベリア・極
東における容僧派と無僧派の現在」

討論者：大塚和夫（東京外国語大学）、吉村貴
之（東京大学） 司会：渡邊日日（東京大
学）

3つの若手企画パネルをキーワードでまとめ
ると、第1パネルは「社会主義時代における学

知」を問うものである。ふたつ目は「跨境」が
テーマであり、国境などの境界線を分断の視点
からではなく、接点として見なおす方法である。
そして最後のパネルの主題は「宗教」だった。
今日、宗教がもつ大きな重要性は改めて言うま
でもないが、このパネルではテーマの現代性を
念頭に置きながら、歴史研究としてイスラーム、
ユダヤ、分離派正教徒に関する報告がなされた。

総括シンポジウム第3部（3日目）「ロシア
と中東の間のコーカサスとその住人たち」は
NIHUプログラム^(注7)・イスラーム地域研究東
大拠点グループとの共催で行われた。この企画
をスラブ研究センター側で立案したのは、21世
紀COE枠で任期付講師採用された前田弘毅氏
であり、事実上、第3部は第2部「次世代の挑
戦」の拡大線上にあった。第3部ではグルジア
を中心としてスラブ・ユーラシアと中東、西ア
ジア、ないしイスラーム世界との接点であるコ
ーカサス地域が取り上げられ、多様で複合的な
「狭間の世界」が描きだされた。第3部のプロ
グラム構成は以下のとおりである。

「ロシアと中東の間のコーカサスとその住人た
ち——宗教と国家にむけた行動と考慮」

[オープニング・セッション] 趣旨説明：前田
弘毅（北海道大学）

ロナルド・グリゴル・スーニー（ミシガン
大学）「文明としてのコーカサス」

討論者：塩川伸明（東京大学）

[セッションA] コーカサス空間へのロシアの
進出

ショーン・ボラック（コロンビア大学）「友
人か敵対者か——エカチェリーナ二世期
コーカサスにおける宗教と従属」

前田弘毅（北海道大学）「通訳になったママ

ルーク、マムルークになった通訳——19世紀におけるマムルーク・システムの遺産」

討論者：北川誠一（東北大学） 司会：松里公孝（北海道大学）

[セッションB] コーカサスのイスラームと帝国権力の遺産

ウラジーミル・ボブロヴニコフ（モスクワ東洋学研究所）「帝国国境における正統イスラーム法学者の創出——帝政末期とソ連期におけるダゲスタンとロシア領外コーカサスの比較」

ミヒヤエル・ケンペル（アムステルダム大学）「帝政末期とソ連初期におけるスーフイズムとイスラーム教育——継続と変容に関する研究上の諸問題」

宮澤栄司（上智大学）「トルコのチェルケス人における地域知識の変容——郷里との再遭遇の衝撃」

討論者：アンケ・フォン・キューゲルゲン（ベルン大学） 司会：小松久男（東京大学）

[セッションC] コーカサス空間の構築——想像された「民族国家」

吉村貴之（東京大学）「祖国の創出——第一次大戦後の近代アルメニア・ナショナリティ」

マイケル・レイノルズ（プリンストン大学）「仲介者か兄弟か——第一次世界大戦期における青年トルコの軍事政策と汎チュルク主義神話」

トルニケ・ゴルダゼ（バクー・フランス研究所）「ソ連体制下のグルジア民族主義——アクター、新潮流、覇権主義的取引」

討論者：池田嘉郎（新潟国際情報大学）、藤波伸嘉（東京大学大学院） 司会：秋葉淳（千葉大学）

今回の会議に海外から招聘した6名の専門家はいずれも国際的に活躍している第一線の研究者ばかりであり、彼らは会場に集まった100名近い聴衆に感激し、コーカサスという特殊なテーマでこんなに多くの聴衆が集まるとは予想していなかったと、歓声をあげたほどである。このコーカサス専門家チームは東京でのシンポジウムのあと、札幌そして京都でも研究会を開催し、全体として今回のコーカサス企画は日本におけるコーカサス研究の本格的幕開けを告げるものとなった。

IV 地域間比較への視座

第3部の「コーカサス」企画はイスラーム研究との連携を目指すという意味で、極めて重要だった。すなわち今回の21世紀COEプログラムでは様々な地域の研究と連携をはかることが大きな柱とされ、第1日目のパネルでは東アジアや東南アジアの研究者との協力が実現したし、帝国論のパネルでは理論と実証の専門家が相互に踏み込んだ対話をおこなった。また2007年3月には東アジア研究者と協働して、スラブ研究センター・大阪大学両21世紀COEプログラム合同研究会「近代東北アジアにおける国際秩序と地域的特性の形成」を実施し^(注8)、専門地域を超えた有機的な連携関係が形成された。「スラブ・ユーラシア学」はスラブ・ユーラシア地域を専門とする研究者だけで閉じてしまう学問ではなく、隣接する地域や関連する研究分野との共同作業を日常化する、という問題提起がこ

のシンポジウムには込められていたのである。

では異なる地域を対象とする地域研究は相互にどう協働しあうことが可能なのか。ひとつは「研究の跨境」である。冷戦終結後、国境のない（ボーダーレス）地球化社会の到来が叫ばれて久しいが、現実には国や地域の境は厳然と存在し、場合によっては高くさえなっている。そのうえで国や地域が相互に深く依存しあう関係が広がっている。すなわち、いまの地球は多様な地域が境を跨いで相互に深く浸透し合う「跨境」の時代にある。跨境時代の地域研究は必然的に他の地域の研究との相互乗り入れを要求する。つまり跨境の研究は「研究の跨境」を求めているのである。「コーカサス」企画はその典型であり、先に挙げた中域圏はその重層的な性格上、「研究の跨境」を不可欠としている。

もうひとつの地域間連携は地域研究の学際性比較である。地域研究は研究対象を総合的に理解することが目的であり、必然的に学際的研究を旨としている。ところが学際的研究のあり方は地域によって大きく異なっている。スラブ・ユーラシアの場合、文^{ぶん}や文学を通じた地域論が他地域の地域研究と比べて際立って重要な役割を演じている。文学はどの地域においても重要な研究対象だが、文学論が学際的地域研究を深化させ、学際的研究によって文学研究自身も新たな意味づけを獲得するというのは、スラブ・ユーラシア学の重要な特徴であると思われる。この特徴がスラブ・ユーラシアにおける言葉や文学のあり方に基づくものなのか、あるいはスラブ・ユーラシア研究者の「まなざし」によるものなのか。こうした研究対象と研究者の関係性を含めて、地域研究の学際性は地域的特性を持っている。

スラブ・ユーラシア以外に目を転じるなら、たとえば日本の東南アジア研究は生態学を地域研究の大きな柱とする特徴を持つ。東南アジアが生態学的分析を最重要としているからなのか、それとも日本の東南アジア研究者の「まなざし」が生態学を特別な研究分野にしているのか。こうした問いかけを研究者が意識的に発することによって、地域研究という学問がいつそう学際的分析力を高めることになると思う。

ともあれ、開かれた地域研究であるスラブ・ユーラシア学は21世紀COE修了後も中国研究者、東南アジア研究者、インド研究者、中東研究者、ヨーロッパ研究者、アメリカ研究者、日本研究者などとの連携や協働を深め、さらに自らを鍛えていこうと考えている。そのためにも以上で述べたスラブ・ユーラシア学のあり方や目指すところについて、読者諸氏から忌憚のないご批判をいただければ幸いである。

（注1） 地域研究の組織連携として2004年に設立された。現在70余りの加盟があり、日本の主要な地域研究関連組織をほぼ網羅する。ホームページは<http://jcas.jp>である。

（注2） 家田修「スラブ・ユーラシア学の構築」『学術の動向』日本学術会議 2007年6月号 36-40ページ。特集「COE道場」『論座』2006年9月号、など。

（注3） 第1巻『開かれた地域研究へ——中域圏と地球化』（家田修編、2008年1月、278ページ）、第2巻『地域認識論——多民族空間の構造と表象』（宇山智彦編、2008年2月、278ページ）、第3巻『ユーラシア——帝国の大陸』（松里公孝編、2008年3月、334ページ）。

（注4） 「スラブ・ユーラシア叢書」はこれまで以下の3巻が刊行された。田畑伸一郎編『石油・ガスとロシア経済』（2008年）、望月哲男編『創像都市ペテルブルグ』（2007年）、岩下明裕編『国境・誰がこの線を引いたのか——日本とユーラシア——』

(2006年)。さらに北東アジアとコーカサスについて近刊予定。

(注5) Slavic Eurasian Studiesはスラブ研究センターのホームページで閲覧可能 (<https://src-h.slav.hokudai.ac.jp/coe21/publish.html>)。

(注6) 詳しくは家田修「序文——スラブ・ユーラシア学とは何か」家田修編『開かれた地域研究へ——中域圏と地球化』2008年、を参照。

(注7) 人間文化研究機構地域研究推進センターによる地域研究推進事業。その概要は<http://www.nihu.jp/areastudies/islam.html>を参照。

(注8) 研究会の詳細は<https://src-h.slav.hokudai.ac.jp/jp/seminors/src/2007.html#3>を参照。

(北海道大学スラブ研究センター教授)